

## 授業「地域イノベーション論」の試み ——地域イノベーション教育による社会貢献と教育の統合——

田坂逸朗

(受付 2015年9月30日)

### 1. はじめに

学生という種が教育という畑で芽吹き育つ。

そう喩えてもよいかもしれないが、メタファーを入れ替えてもいい。

教育という可能性の種が、学生という畑で芽吹き能力を開花する。

「させる力」から「する力」へ。

アダム・カヘンはファシリテーションに関して、そう述べている\*<sup>1</sup>。

自ら立てた課題に立ち向かうとき課題解決能力は最大になる。

ハリソン・オーエンはOSTに関して、そう述べている\*<sup>2</sup>。

「教える」から「学ぶ」へ、という文脈も同程である\*<sup>3</sup>。

イノベーションという用語は、その希求性からもはや経済学の用語ではなく、一般語になったと言っていい。既存のモノ・コト・あり方・やり方によらず、イノベーションを起こす、とは、現代のあらゆる分野で強く訴求されている。

「地域イノベーション論」の授業は、大学におけるイノベーション人材の育成を命題として、イノベーション・センスの涵養と、イノベーションに向かう自己有用感の獲得ということを目論んでいる。かつ、それは社会貢献に直結しており、社会課題を糸口に新しい社会デザインを想起できる意志と意欲のある中堅をなす地域人材の育成も意味している。イノベーション人材は、イノベーターだけにはとどまらない。少数派が起こす例外としてスタートするイノベーションにいち早く反応するアーリー・アダプター\*<sup>4</sup>、そして、公的機関や投資家など、もしくは地域そのものがもたらすエコシステムとしてのイノベーション環境の（制度設計などの）担い手など、イノベーションに対して関与の意思を持つ人材が多くいる地域は、必然的にイノベティブになる。

自らイノベーションのための「問い」を立てながら、地域課題を見つめ直し、「する力」を発揮する人材。1年次に「地域イノベーション論」を履修した学生の多くが、2年次にはPBL（問題基盤学習）型授業「ひろしま未来協創プロジェクト」を履修している。これ

は実際に地域に出向き対話し、実践的な地域課題に向きあいながら、その解決を目論む授業で、「地域イノベーション論」の実践編となっている。いわば、「地域イノベーション論」は、その実践的なPBLのために、教室でできる事前演習をなしているとも言える。

グループ演習を旨とするこの授業が、学生という畑で教育という可能性の種が芽吹く端緒をなす。

この稿では、「地域イノベーション論」の授業の組み立てを題材に、その機序や効果を明らかにし、リベラルアーツ授業としての今後の課題をまとめたい。

## 2. 地域イノベーションをどう教えるか？

広島修道大学は、文部科学省COC（地（知）の拠点整備事業）に「イノベーションブリッジによる広島未来協創プロジェクト」というテーマで申請し、2013年に採択された。この採択は、「地域つながるプロジェクト」や地域との熟議など、学生主導による地域貢献のこれまでの実績によるところが大きい。研究分野、社会貢献分野、教育分野と、3つの分野の好循環を目論むこのプロジェクトにおいて、教育分野からの新たな働きかけとなるものが「地域イノベーションコース」の設置である。学部横断で、学生たちは他学部の学生ともグループを組みながら課題と向きあう学習を通じて、広島の未来を描き創造できる人材へと涵養される。具体的には、「学部での専門性を活かしつつ、持続可能なコミュニティの発展に能動的に寄与できる人材」、「地域課題から新しい価値を創造できる人材」を育成することを目的とする、と謳っている。

キース・ソーヤーは、「会話はイノベーションの揺りかご」であるとして、個々人の閃きがリアルタイムで交わされるコラボレーティブな会話こそ「集団的な閃き」を触発するグループ・ジーニアスというイノベーションのプロセスである、と論じている<sup>\*5</sup>。地域でのイノベーションを惹起するためのグループ・ジーニアスは、自己組織化によるグループづくりと会話の演習によって培われるだろう。

「リーン・スタートアップ」の提唱者、エリック・リースは、「リーン・シンキング」を「すばやく、機敏で、継続的な学習」に基づく不確実性の機会の創出である、と述べている<sup>\*6</sup>。重厚長大な計画を立案し状況変化によらず黙々と実行するという「計画」主義から、現在「戦略」思考が地方自治体にまで求められている。「リーン」は、戦略思考のさらに先にある「小さくスタートさせ、大きく伸ばす」イノベティブなスタートアップの思想のひとつである。地域がイノベーションを行動化しようとするときに「完全なる計画」の罠に陥らぬよう、「スタート」を促すコーディネート力は、デザイン思考やプレゼンテーション・スキルの演習によって培われるだろう。

クレイトン・M・クリステンセンは、「イノベティブな人材の五つの発見力（ディスカ

バリー・スキル)」として、次の5つを挙げている\*7。

- ①関連づける力 (associating)
- ②質問力 (questioning)
- ③観察力 (observing)
- ④実験力 (experimenting)
- ⑤人脈力 (networking)

これらは、生来のものではなく、前向きな努力によって開花される「イノベーターのDNA」であるとしている。さらに、それぞれの「力」について、開発・強化する方法を述べている。実践においてカギを握る「質問力」は、現状に疑問を呈する質問を書き出すことで活性化される。「観察力」を磨くには、特定の顧客がどのような経験をしているかを、自分の判断を保留して中立な立場で観察してみるとよい。「実験力」を強化するには自分が得た知識から新たな仮説を立て、それを検証するマインド・セットを忘れないこと。「人脈力」を向上させるには、知り合いのなかで創造的と思われる人たちや、これまで会ったことのない職種や企業、業界、国籍の人たちに、質問をしたりアイデアを教えてもらったり自分のアイデアについて意見をもらったり、メンターとして手を貸してもらえよう頼んでみたりするのがよい、とそれぞれ述べている。そして、これらの四つの発見力を利用しながら、新たな知識の理解・分類・蓄積を頻繁に繰り返すことで「関連づける力」を強化することができるとしている。

であるなら、地域課題のイノベティブな解決策を発見するためのスキルの養成は、この5つの発見力を旨として、教室内で多様な人的交流を行いながら、新たな知識の供与と共に、発言する機会を多数設ける、質問と観察と仮説化の演習によって培われるだろう。

地域イノベーションをどう教えるか。

将来の社会の牽引者である学生たちはこれから、「地域イノベーション」によって、まだ見ぬ課題をまだ見ぬ解決方法で解決する必要がある。まだ見ぬ経済状況に対応し、まだ見ぬ社会を創造する必要がある。過去の、あるいは現在の、地域イノベーションについて既知の機序の講義についてはある程度以下にとどめ、できる限りの時間を演習に充てる教え方を設計した。演習に次ぐ演習で、相互の会話がイノベーションのセンスを磨いていく。「会話」という「イノベーションの揺りかご」を疑似体験し、「リーン・スタートアップ」の実行性を体得する「リーン・シンキング」で、「イノベーターのDNA」の開花に在学中に近づいておく。学生こそ、教育という可能性の種を開花させる畑である。

### 3. 「地域イノベーション論」の試み

「地域イノベーション論」ではどのような授業を行っているか。どのような内容で、どのような授業スタイルなのか、そして、どのような効果を目論んでいるのか。

まず、ここに2015年度前期科目のシラバスを示す。

授業の題目	地域イノベーション論～地域でイノベーションが起きるとのこと Introduction to Local Innovation
授業の概要	地域課題を自ら発見し、着想し、創造性を発揮するイノベーション人材を育成、ひいては広島地域で、イノベーションを起こす素地づくりを目指します。真摯に言葉を聴く力、対話する力、気づく力、かけあわせを進める力を醸成し、社会のロールモデルを生み出す協創的な精神を培います。そのために、課題発見やイノベーション、アイデアプランニングの演習を、初学者にも向く初歩的なプログラムで重ねながら、まだ見ぬものに立ち向かい、まだ見ぬ解決方法を編み出せる知恵の取得を対話によって導きます。コミュニケーション力のある意欲的な学生を希望します。
学習の到達目標	地域における社会課題を独自に発見し、見つめ、イノベーションの着想を得ることができる。また、そのための対話的風土を自ら醸成できる。
成績評価の方法・基準	授業への参加度、各回のワークショップの成果、および期末のレポートによって総合的に判断します。毎回、授業をふりかえる小レポート（リフレクションカード）があります。試験はありません。成績評価：参加度30%・成果物40%・期末レポート30%

15回の授業設計は以下である。

授業各回90分は、習得すべき知識の講義と演習で構成している。演習は毎回、メソッドを変え、常に新鮮なセンスの涵養を目論んだ。冒頭では、シラバスを元に授業15回の流れを毎回確認し冒頭言とし、講義部分には話題提供を添え、学生の興味関心を喚起した。演習部分は、アクティブラーニングを旨として、主体的な学びを喚起し、ファシリテーターとしてグループ演習や個人ワークを支援した。最後の10分間を手を止めてふりかえり（リフレクション）を行うふりかえりカードの時間とした。このふりかえりカードは、その次の回でいくつかの好例を紹介し、参加・学びのあり方のモデルを示した。

<p><b>第1回・新しい価値を生む新しい役割～イノベーションからはじめよう</b> 【地域イノベーション】</p> <p>○主な内容：ガイダンス、リベラルアーツということ、イノベーションが次のスタンダードをつくる、チームと関係性、対話（聞いて発見する能力）、グループワークのメソッドについて</p> <p>○演習：AIインタビュー（聴く力）*<sup>8</sup>●ペアワーク</p>
<p><b>第2回・社会のロールモデルとしての地域イノベーション</b> ～社会を使う人から、社会をつくる人へ</p> <p>【3年後に起きること】</p> <p>○主な内容：シュンペーターの「イノベーション（innovation）」の定義</p> <p>○演習：イメージをアウトプットする演習、マグネットテーブル*<sup>9</sup>●自己組織化グループ</p>
<p><b>第3回・社会課題からのイノベーション～課題を発見する力</b> 【地域課題とは何か】</p> <p>○主な内容：地域課題、当事者性、社会構成性、先駆性（ボランティア性）</p> <p>○演習：OST、課題解決とは何か●自己組織化グループ</p>

<p><b>第4回・チームビルディングと地域コーディネート～つなげば未来が見えてくる</b>  <b>【チームビルディング】</b>                  ○主な内容：タックマン・モデル，堀 公俊のファシリテーション論，三角二不二のチームメンテナンス論，ハリソン・オーエンの OST 論                  ○演習：チーム・インテグレーション*<sup>10</sup>●チーム演習（ランダム名簿でリーダーを指名した）（前編）</p>
<p><b>第5回・ダイアログとは？～課題に「対話」で立ち向かう</b>  <b>【ダイアログ】</b>                  ○主な内容：シュンペーターのイノベーションの5つの内容，ラリー・キリーのイノベーションの10タイプ，ダイアログ（オープンに話し，オープンに聞く）                  ○演習：ボード・ミーティング*<sup>11</sup>●ボードによる自己組織グループ</p>
<p><b>第6回・人と人をつなぐファシリテーション</b>  <b>【地域ファシリテーション】</b>                  ○主な内容：ファシリテーション（集団の知的相互作用の促進）                  ○演習：ファシリテーション演習●チーム演習（ランダム名簿でリーダーを指名した）（後編）</p>
<p><b>第7回・「平凡は敵だ！」のワーク～新しい価値を生むアイデアの演習1</b>                  （人と人をつなぐファシリテーション・後編）  <b>【地域課題と価値創造】</b>                  ○主な内容：課題発見と課題解決，イノベーションと地域イノベーション，アイデアの1H5W                  ○演習：グループディスカッション演習●傾向別（名簿）グループ（前編）</p>
<p><b>第8回・発見した課題を輝きに変えるイノベティブな活性化</b>  <b>【イノベティブな地域活性化】</b>                  ○主な内容：3つの地域活性化（交流の活性化，経済の活性化，活動の活性化，スタートアップ）                  ○演習：グループディスカッション演習●傾向別（名簿）グループ（後編）</p>
<p><b>第9回・マーケティングを地域イノベーションに活かす</b>  <b>【マーケティング】</b>                  ○主な内容：プロダクト・アウトからマーケット・インへ，ソーシャル・マーケティング（行動変容の促進），マーケティング3.0（価値主導のマーケティング）                  ○演習：グループディスカッション演習●テーマによる自己組織化グループ（マグネットテーブル）</p>
<p><b>第10回・「未来に点を打つ」ワーク</b>                  ～ダウンシフト・イノベーションとサステナブル・イノベーション  <b>【持続可能なイノベーション】</b>                  ○主な内容：持続可能性，ピーター・センゲと藤村靖之，グリーン経済                  ○演習：グループディスカッション演習●テーマによる自己組織化グループ（リーダーズミーティングあり）</p>



<p><b>第11回・イノベーションが生まれたあとにすること</b>                  ～イノベーション・アダプターが人をワクワクさせる</p> <p><b>【イノベーション・アダプター】</b></p> <p>○主な内容：イノベーターとアダプター（キャズム理論）、クリステンセンの「イノベーターの5つの発見力」</p> <p>○演習：アダプターシート●個人ワークとシェア</p>
<p><b>第12回・アイデアの評価について～価値を生むアイデアの演習2</b></p> <p><b>【アイデアの評価】</b></p> <p>○主な内容：「評価」と「批評」、アイデアの評価の罫、行動経済学（フレーミング、初期値効果、保有効果）</p> <p>○演習：アイデアの評価シート●個人ワークとシェア</p>
<p><b>第13回・トップダウンかボトムアップか～イノベーションの意思決定</b></p> <p><b>【イノベーションの意思決定】</b></p> <p>○主な内容：意思決定、トップダウンとボトムアップ、「学習する組織」、リーン・スタートアップ、プロセスと合意形成、シナリオプランニング</p> <p>○演習：シナリオプランニングシート●個人ワークとシェア</p>
<p><b>第14回・イノベーションとプレゼンテーション～「ピッチ」が社会を変える</b></p> <p><b>【ピッチしよう！】</b></p> <p>○主な内容：「発表」と「プレゼンテーション」と「ピッチ」、[スパークプラグ]</p> <p>○演習：ピッチ<sup>*12</sup>●ピッチによる自己組織化グループ（2-4-8セッション）</p>
<p><b>第15回・地域イノベーターになろう～地域をイノベーションに巻き込む</b></p> <p><b>【未来新聞】</b></p> <p>○主な内容：イノベーションが地域を変える、地域イノベーションのはじまりのとき</p> <p>○演習：未来新聞の記事づくり（地域を巻き込むポイント探し）<sup>*13</sup>●ピッチによる自己組織化グループ</p>

#### 4. イノベーションと地域イノベーション

「地域イノベーション」とは、これまで企業や国家の視点から語用されることの多かった「イノベーション」を、地域の文脈で意味づけし直したものである。内田純一は、「地域イノベーション戦略」として、産学官、あるいは地域内外のアクターがどのようにイノベーションを推進していくかを論じている<sup>\*14</sup>。成功したイノベーションが地域の社会システムと共に共進化し、イノベーションの連鎖が起きるイノベティブな地域となるまでの過程に関する論説は、これからの地域主導のイノベーション戦略の根幹づくりに寄与するものである。そこでは、誘引モデルとして（企業誘致モデルではなく）いかに有能なアクターを惹きつけるか、そのアクターのネットワークをいかに重層的につなげるか、そのためのシステムが整備された「イノベーション空間」をいかに作り続けるか、その成否の鍵を、地域ブランディングアプローチが握っているとしている。

同じように、野澤一博も、イノベーションにおける「地域」とは、文化的、政治的、経済的に領域として囲まれた静態的な存在というより、領域を超えた関係が多く集まるダイナミズムを備えた動態的な場所であると言える、と述べている<sup>\*15</sup>。関係性構築の涵養地となり、領域を超えたさまざまな分野の人材や機関がコーディネートされ、創造された成果が受容される地域こそが希求される、としている。

ヨーゼフ・シュンペーター、チェスブロウらにはじまるイノベーション論は、昨今、経済、科学技術、経営、という視点から、社会デザインやライフスタイルをも対象とする論説へと多様化しつつある。地域イノベーションもまたその文脈にあって、地域志向での社会デザインのつくり直しに呼応している。縣市町（国によっては州や広域市）という単位、あるいは、都市や工業などの集積地という単位からさらに広範に、「地域」をイノベーションのステージとして捉え直すとき、想起されるイノベーションのあり方は、さらに多様化する。

イノベーションは、地域から起こり、地域は、それが連鎖するよう、イノベティブであることを目指す。地域イノベーション論は、地域における、そのイノベーションの起こし方・進め方のステップ論でもある。地域がイノベティブであろうと目指すなら、地域自身そのものがイノベーションの対象であるとも言える。地域イノベーションによって、地域がダイナミズムを備えた動態的な場所、「イノベーション空間」になるとき、誘引モデルが機能しアクターが惹きつけられ、関係性構築の涵養地としてコーディネートされた「アクターのネットワーク」が地域ブランディングとして、創造された成果を受容する地域に変容し、地域の社会システムと共に共進化することができる。そのステップを、授業「地域イノベーション論」は記述する。

イノベーションは、クリステンセンのいう持続的なイノベーション（連続的イノベーション）、破壊的なイノベーション（非連続的イノベーション）によらず、そのアイデアにはじまり、リアライジングし、普遍化して完了に至る。イノベーションとは、未来の普通を今つくることにほかならない。地域がその地域性をたいせつにするなら、連続性を好み、破壊性を避けるだろう。しかし地域課題に焦点が当たるとき、その解決への欲求の度合いによっては、非連続的イノベーションへの希求が高まるだろう。最も悩ましい課題こそが輝きが変わるとき、その地域は非連続的イノベーションを達成したと言える。

## 5. 地域イノベーション人材

広島修道大学地域イノベーションコースの授業「地域イノベーション論」が題材地域とする広島地域、およびその圏域内のそれぞれの地域では、強みを活かす競争優位のイノベーションより、課題克服による非連続的イノベーションこそが想起されるべきである。地域イノベーションのステップ論として、次に、このイノベーション達成へと向かうアクター

について整理しておきたい。

これまでの国家のイノベーション、経済学としての、おもに技術革新として論じられてきたイノベーションでは、アクターは、研究機関や、企業、行政支援機関、コーディネーター機関、企業家（起業家）などであるが、地域イノベーションでは、これらに加えて、ローカルな枠組みや、企業間の協調や信頼関係、企業家精神、知識インフラ、コミュニティなど、無形のものが加えられている論説もある<sup>\*16</sup>。実際に、イノベーションが想起され、実行段階へと向かうときのアクターがこれにあたるなら、これらを含めて、イノベーションを最初に志す段階から見たアクターを、ここでは次の3つに単純化して記述し直しておく。

1. イノベーター
2. アーリー・アダプター
3. イノベーション環境の担い手

イノベーターは、発案者であり、初動者であり、端緒をなすものであり、起点をつくる者である。企業や起業家や個人などがこれにあたる。ときとして研究機関がこれをなすこともある。アーリー・アダプターは、イノベーターに反応し追随する者である。イノベーターとネットワークを形成するアクターであり、この層の厚さ、多重性が地域のイノベータティブさを測る指標になるだろう。制度設計など、イノベーション環境の担い手は、行政支援機関やコーディネーター機関がこれをなし、加えて、ローカルな枠組みや、企業間の協調や信頼関係、コミュニティなども関与することになる。地域イノベーションが、「イノベーション空間」に依拠し、「アクターのネットワーク」から生まれるものであるなら、もはやイノベーター単体での活動では、それは難しいといっている。地域の社会システムとしての、アーリー・アダプターやイノベーション環境の担い手も含めた中堅人材の育成が、地域をイノベータティブにしていくのだ。

では、どうやったらアクターとしてイノベーションを志すこれらの人材が育成できるだろうか。

授業「地域イノベーション論」では、それらを5つの能力に収められた。

- (1) イノベーターとして、アイデアを行動に変換するリーダー力
- (2) イノベーション・コーディネーターとして、チームを鼓舞するチームビルディング力
- (3) イノベーション・アダプターとして、イノベーションの萌芽に応じる支援力
- (4) 環境を整備しイノベーターやアーリー・アダプターの活動を促進する制度設計力
- (5) イノベーションを社会に投げかける先駆者としての発信力

そしてこれらの能力は、イノベーション・センス、自己有用感、自ら関与するコミュニケーション姿勢によって裏打ちされる。



授業では、以下の各回がこれに対応している。

- イノベーターとして、アイデアを行動に変換するリーダー力を養う。これは、
- 第1回【地域イノベーション】(AIインタビュー)
  - 第2回【3年後に起きること】(マグネットテーブル)
  - 第3回【地域課題とは何か】(OST)
  - 第7回【地域課題と価値創造】(グループディスカッション)
  - 第8回【イノベティブな地域活性化】(グループディスカッション)
  - 第9回【マーケティング】(自己組織化グループ)(マグネットテーブル)
  - 第10回【持続可能なイノベーション】(自己組織化グループ)
- の各授業での体験が功を奏するだろう。

- イノベーション・コーディネーターとして、チームを鼓舞するチームビルディング力を養う。これは、
- 第4回【チームビルディング】(チーム・インテグレーション)
  - 第5回【ダイアログ】(ボード・ミーティング)
  - 第6回【地域ファシリテーション】(ファシリテーション演習)
- の各授業での体験が功を奏するだろう。

- イノベーション・アダプターとして、イノベーションの萌芽に応じる支援力や、環境を整備のための制度設計力を養う。これは、
- 第11回【イノベーション・アダプター】(アダプターシート)
  - 第12回【アイデアの評価】(アイデアの評価シート)
  - 第13回【イノベーションの意思決定】(シナリオプランニングシート)
- の各授業での体験が功を奏するだろう。

- イノベーションを社会に投げかける先駆者としての発信力を養う。これは、
- 第14回【ピッチしよう！】(2-4-8セッション)
  - 第15回【未来新聞】(ピッチによる自己組織化グループ)
- の各授業での体験が功を奏するだろう。

さらに、各演習のメソッドは、ファシリテーションと OST が、その基底をなしている。

第1回○演習：AIインタビュー（聴く力）	ペアワーク
第2回○演習：イメージをアウトプットする演習，マグネットテーブル	自己組織化グループ

第3回○演習：OST, 課題解決とは何か	自己組織化グループ
第4回○演習：チーム・インテグレーション	チーム演習（ランダム名簿でリーダーを指名した）（前編）
第5回○演習：ボード・ミーティング	ボードによる自己組織化グループ
第6回○演習：ファシリテーション演習	チーム演習（ランダム名簿でリーダーを指名した）（後編）
第7回○演習：グループ演習	傾向別（名簿）グループ（前編）
第8回○演習：グループ演習	傾向別（名簿）グループ（後編）
第9回○演習：グループ演習	テーマによる自己組織化グループ
第10回○演習：グループ演習	テーマによる自己組織化グループ（リーダーズミーティング）
第11回○演習：アダプターシート	個人ワークとシェア
第12回○演習：アイデアの評価シート	個人ワークとシェア
第13回○演習：シナリオプランニングシート	個人ワークとシェア
第14回○演習：ピッチ	ピッチによる自己組織化グループ（2-4-8セッション）
第15回○演習：未来新聞の記事づくり（地域を巻き込むポイント探し）	ピッチによる自己組織化グループ

## 6. 教育と社会貢献を統合する

何かを生み、磨いた経験は大きい。それがアイデア段階のものであっても、住む地・広島の場合を探求した、地域課題由来の個別具体的な諸事象の発見であれば、それを着想し、共にディスカッションし、仮説と検証を重ねた経験は、学生にとって血肉となる。

イノベティブな解決策が希求される地域課題は多くある。「未解決に、まだ多くある」のではない。社会構造の変化と共に「これからも増え続ける」可能性も少なくない。真に課題解決力のある人材の輩出は、ひとつの社会貢献である。課題解決が即座にはなされなくても、それに向き合い、絶えずエネルギーを注ぐことができる人材の輩出は、確実に地域を変えていく。

学生が学ぶ、専門性としての学問に加えて、それを解決の手段へと新結合させ用いることが、リベラルアーツとしての「地域イノベーション力」の涵養である。地域の課題解決を演習に、教育の課程でそれらの課題を題材とするなら、特段の社会貢献を行う意識なしに、PBLが啓くりベラルアーツが、学びのフィールドにおいて、教育と社会貢献を統合する。そこにあるのは、専門性を「知る」とどまらない、「活かす」ということへの、レインチェンジである。

大学教育が、社会貢献によってリーダーシップを得るように、また、地域も、教育への

貢献によってエンパワーメントされる。それらが対等な共同作業であるときにこそ、学習者である学生も、学ぶものが大きい。

地域がエンパワーメントされる場面に立ち会うことは、学生に、地域志向への傾注の機会をもたらす。そして、学生がその場で地域志向を得ていく変化に立ち会うことが、地域へ、さらなるエンパワーメントをもたらす。地域をフィールドにしながら、地域の課題解決の経験に触発され地域志向化する学生こそ、地域イノベーションの端緒をなす「誘引モデル」の体現でもある。客観的な地域資源より、個人的な、地域“体験”が、魅力の実感の本体となり得るからだ。その意味において、学生の、地域課題解決への参画における学びそのものが、社会貢献であるといえる。

## 7. おわりに～ファシリテーターから地域人材へのメッセージ

筆者は、約10年にわたってさまざまな話しあいの現場でファシリテーターを務めてきた。企業や公共機関の組織改革、住民の課題解決、合意形成、未来創造、市民団体やコミュニティの活動促進まで、その現場は多岐にわたるが、中でも、地域の現場に学生が共同するとき、大きな成果を見ることがたびたびあった。イノベーションはときとして、人と人の思わぬ新結合がそれをもたらす。シュンペーターのいう「新結合」という用語の、クレイトン・クリステンセンによる解釈は、「一見関係なさそうな事柄を結びつける思考」である。地域と学生が、一見関係なさそうなアクターであるとき、イノベーションは起きやすいともいえる。

文部科学省 COC 事業を契機に、広島修道大学への着任という機会をいただき、はからずも、ファシリテーションとイノベーションをかけあわせる教育を行う、という試みのチャンスをいただいた。

大学教育の現場では近年、「アクティブラーニング」の導入が喫緊であると叫ばれている。経験と省察に基づく能動的な学習としてのアクティブラーニングと、地域志向のPBL、地域イノベーション教育は、親和性が高いと実感している。

これまで偶然によるところが大きかった地域と学生の新結合を、ここでは、意図して目的化することによって、成果を生もうとしている。学生にとって地域は、胸を借りる貴重なフィールドであり、地域にとって学生は、意図的に作り出した“偶然”のアクターを意味している。教育機会の提供にとどまらない「地域誘引」のチャンスを内包したアクターの新参加は、地域イノベーションの足がかりをなす、じゅうぶんなエネルギーに満ちている。

ファシリテーターが場に対して行うことは「気づき」の幫助である。授業としての「地域イノベーション論」をリベラルアーツと呼ぶにはいくつかの課題がある。アクティブラーニングとして、ルービックを整えること。効果的なフィードバックを与え、学習の進行途

中に、学生が軌道修正できる機会を与えること。伝え方が未熟な学生の意図を地域に伝えるじゅうぶんな補足を行うこと。得られたスキルを学生自身が確認できる機会を用意すること。それらが、授業遂行の上での今後の課題である。

課題解決の内実が本質的であればあるほど、未来創造のインパクトが大きい。未来創造が本質的であればあるほど、わずかな言葉遣いの差が大きな影響力を持つ。授業の中でたびたび紹介するのは、ケネス・J・ガーゲンの唱える「社会構成主義」である<sup>\*17</sup>。言葉は現実をありのままに写しとるものではなく、むしろその表現によって未来を創造している。そのあらゆる表現は、人と人との関係性から意味を与えられている。そのために、未来創造の根幹は“対話”である、と。今ここにある課題を、今日の前の者に自らの言葉で語りかけること。その言葉の新結合の延長線上に、イノベーションは、ある。



## 注

(\*1) 南アフリカにおいて1991年から民族和解を推進するモン・フルー・シナリオ・プロジェクトに参画したファシリテーターであるアダム・カヘンは著書『未来を変えるためにほんとうに必要なこと』(2010)中に、「する力」と「させる力」として、力の生成的な面は自己実現の衝動としての「する力」であり、退行的な負の面は他者の自己実現を盗み取る「させる力」である、としている。人は誰かによって解決されたいと願っているのではなく、真の解決は「わたしがやる」によってなされる、と述べている。ここでいう「ファシリテーション」については、以下を列举しておく。

堀 公俊はファシリテーションを、「集団による知的相互作用を促進する働きのこと」としている(『ファシリテーション入門』, 2004)。

フラン・リースはファシリテーションを「リーダーシップの一形態」で、「グループのメンバーを鼓舞し、誘導し、参加を促して、創造性や当事者意識、生産性を引き出す」ことと定義している(『ファシリテーター型リーダーの時代』, 2002)。

また、中野民夫は、「簡単には答えの出ない問題について問い合う場を作り、対立する集団や個人の間をできるだけ容易にし、切れてしまった関係のみならず、人と社会、人と自然の世界をつなぎ直し、一人ひとりの存在、経験、知恵を引き出し、バラバラではできなかった相乗効果を促

- し、励まし力づける」としている（要約：田坂逸朗）（『ファシリテーション革命』, 2003）。津村俊充は「関わり方のひとつ」で、「個人やグループの気づき、成長（変化）に関わり、“学習”を援助促進すること」としている（『ファシリテーター・トレーニング』, 2010）。
- ( \* 2 ) OSTは、輪になってテーマ出しを行い、自己組織化された即席の分科会を立てる話しあいの形式。課題解決のための話しあいに用いられる。ハリソン・オーエンが創始した（『オープン・スペース・テクノロジー』, 2007）。
  - ( \* 3 ) 「教える」から「学ぶ」へ、はアクティブラーニングに際してつとに引用される、バーとタグが提示したパラダイム概念。知識は伝達されるものではなく、構成され、創造され、獲得するものである、としている。ここでは、溝上慎一『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』（2014）などを参照した。
  - ( \* 4 ) エベレット・ロジャースは、イノベーションが社会化していく過程を解説した「普及学」を確立した。新しい概念や商品、文化などの普及は、イノベーター、アーリー・アダプター、アーリー・マジョリティ、レイト・マジョリティ、ラガードの各層を経て進行してゆくとした。これに範を取り、ジェフリー・ムーアは、それぞれの層の間に溝（ギャズム）があるが、最も重要な鍵はアーリー・アダプターが握っているとした。なお、early adopters は、カタカナでは「アーリー・アダプター」と表記するのがよいかもかもしれないが、「アーリー・アダプター」という表記のほうが定着している感があるため、表記はここでは「アーリー・アダプター」とした（ジェフリー・ムーア『ギャズム』, 2002）。
  - ( \* 5 ) キース・ソーヤー『凡才の集団は孤高の天才に勝る』, 2009
  - ( \* 6 ) エリック・リース『リーン・スタートアップ』, 2012
  - ( \* 7 ) クレイトン・M・クリステンセン『C・クリステンセン 経営論』, 2013
  - ( \* 8 ) AI (Appreciative Inquiry) は、ベアインタビューにはじまる組織改革の話しあいプログラム。「最善の状態で行われる人間の組織化と変化は、肯定することと正しく認識することを土台とした問いかけ（インクワイアリー）の連鎖的なプロセスである」としている。ここでは、聴く力の演習に用いている（ダイアナ・ホイットニー&アマンダ・トロステンブルーム『ポジティブ・チェンジ』, 2006）。
  - ( \* 9 ) マグネットテーブルは、参席者の一人ひとりが話しあいたいテーマを元に主体的にグループをつくり話しあう形式。OST形式の簡易版として機能する。特定非営利活動法人場とつながりラボ home's vi が推奨している。
  - ( \* 10 ) リーダーとチームが一体感を得るためのエクササイズ「リーダーズ・インテグレーション」に範を取り、この授業では便宜上「チーム・インテグレーション」と呼んでいるアクティビティを供給している。リーダーが明示的でなくても、即席ですばやく一体感を得る必要があるとき、チームとしての相互の自己紹介を機能的に構造化するファシリテーション技法として位置づけている。筆者による創案。
  - ( \* 11 ) ボード・ミーティングは、会議の冒頭でホワイトボードや壁に貼られた模造紙などに、各自が持ち込みたい議題を書き出すのアジェンダ志向の会議の手法。フューチャーセンターなどで用いられており、日産自動車の会議手法として喧伝されている。ここでは、ボードの前の即席の分科会を自己生成する手法として授業で用いた。
  - ( \* 12 ) ピッチは、起業家が投資家や新たなメンバーを巻き込むためのワークショップ（ワーキング）の形式のひとつ。参加者ひとりひとりが短いプレゼンテーションを行い、賛同が多く集まったものを核に即席のグループを組み、ディスカッションやビジネスモデルづくりなどの作業を行う手法。
  - ( \* 13 ) 未来新聞は、市民活動などで普及している未来創案のためのワークショップ手法である。未来を創造し、あたかも達成された未来のように記事づくりをすることによって、達成のイメージを具体化し、行動化の端緒とするグループワーク。授業においては、地域を巻き込むポイント探しに活用した。
  - ( \* 14 ) 内田純一『地域イノベーション戦略』, 2009
  - ( \* 15 ) 野澤一博『イノベーションの地域経済論』, 2012
  - ( \* 16 ) ここでは、文部科学省科学技術政策研究所『日本における地域イノベーションシステムの現状と課題』（2009）などを参照した。
  - ( \* 17 ) 社会構成主義は、4つのテーゼを持っている（ケネス・J・ガーゲン『あなたへの社会構成主義』, 2004）。



## 参 考 文 献

- アダム・カヘン『未来を変えるためにほんとうに必要なこと』、英治出版、2010  
アダム・カヘン『手ごわい問題は、対話で解決する』、ヒューマンバリュー、2008  
堀 公俊『ファシリテーション入門』日本経済新聞社、2004  
フラン・リース『ファシリテーター型リーダーの時代』プレジデント社、2002  
中野民夫『ワークショップ』岩波書店、2001  
中野民夫『ファシリテーション革命』岩波書店、2003  
津村俊充（編）／石田裕久（編）／南山大学人文学部心理人間学科（監修）『ファシリテーター・トレーニング』ナカニシヤ出版、2010  
ちよん せいこ『人やまちが元気になるファシリテーター入門講座』解放出版社、2007  
ハリソン・オーエン『オープン・スペース・テクノロジー』ヒューマンバリュー、2007  
溝上慎一『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』東信堂、2014  
ジェフリー・ムーア『キヤズム』翔泳社、2002  
キース・ソーヤー『凡才の集団は孤高の天才に勝る』ダイヤモンド社、2009  
エリック・リース『リーン・スタートアップ』日経BPマーケティング、2012  
ブランド・クーパー&パトリック・ヴラスコヴィッツ『リーンアントレプレナー』翔泳社、2014  
クレイトン・M・クリステンセン『C・クリステンセン 経営論』ダイヤモンド社、2013  
クレイトン・M・クリステンセン『イノベーションのジレンマ』ダイヤモンド社、2013  
クレイトン・M・クリステンセン『イノベーション・オブ・ライフ』ダイヤモンド社、2013  
ダイアナ・ホイットニー&アマンダ・トロステンブルーム『ポジティブ・チェンジ』、ヒューマンバリュー、2006  
漆原次郎『日産 驚異の会議』東洋経済新報社、2012  
内田純一『地域イノベーション戦略』芙蓉書房出版、2009  
野澤一博『イノベーションの地域経済論』ナカニシヤ出版、2012  
ケネス・J・ガーゲン『あなたへの社会構成主義』ナカニシヤ出版、2004  
デヴィッド・ボーム『ダイアローグ』英治出版、2007  
C・オットー・シャーマー『U理論』英治出版、2010  
ピーター・M・センゲ、C・オットー・シャーマー、ジョセフ・ジャウオースキー、ベティ・スー・フラワーズ『出現する未来』講談社、2006  
香取一昭／大川 恒『ホールシステムアプローチ』日本経済新聞出版社、2011

Summary

Trial of “Local Innovation Theory” Lecture  
——Integration of Social contribution and Education  
by Local innovation education——

Itsuo Tasaka

“Local Innovation Theory” is one of the lectures included in the Local Innovation course of Hiroshima Shudo University. This minor course is designed to foster innovative human resources. This lecture cultivates the students’ innovative sense and develops their self-confidence toward innovation.

The innovative human resources do not mean only innovators.

Also included are the ‘Early Adopters’ who quickly respond to innovations which start as exceptions, and the members of an ‘ecosystem’ of innovation such as members of public institution and investors. If an area has rich innovative human resources, such an area necessarily grows more and more innovative.

The university can contribute to society by developing local human resource for proposing new social design willingly and eagerly based on social problems.